

第3編 墓 碑

前述のように、墓碑については、本町の歴史に関係あるものにとどめ、内容については、詳でない墓碑もあるが、それ等については又別の機会に記述することとし、判明しているだけを登載した。

二四一 (伊藤先生の墓)

所在地 大字馬見原(古町)

国道二六五号線左側に墓地があり、ここに伊藤先生の墓が建立されている。普通の墓石より大きいので目につきやすい。先生が、如何なる学者であったか、詳しいことはわからないが、相当、偉い先生であったことが偲れる。

門人の方々により建てられたもので、墓石(高さ一・〇八、中〇・四八、厚〇・四八米)、台石三段(上段〇・六四、中段〇・九、下段一・二五米の角)の切石で建てられている。

碑文

正面 伊藤先生墓

左面 賢徳院繹皆遵信士 筆道門人中

右面 天保十年(一八三九)亥十月十四日

後面 嫡子伊藤鹿太良氏明

門人之内世話人

小堀尉左エ門

佐藤寿八良

八田利左エ門

八田 常助

永四良

弥兵エ

慰右エ門

と銘記あり。

二四二 (藤原氏佐藤駿河守の墓)

所在地 大字長崎(上長崎)

町道右側の墓地の中に、榊の古木の根に自然石で、相当古い墓碑が建っている。

碑(長〇・六

五、下巾〇・三



行年七十七才

五、上巾〇・二五米)

碑に、藤原氏佐藤駿河守 享保十六年(一七三二)七月歿
願主 佐藤源治郎と銘あり

由緒ある墓碑と聞くが、詳しきこと不明である。

二四三 (菅尾市兵衛の墓)

所在地 大字菅尾

通稱「鳥り越え」と云われて

いるところに旧藩時代の菅尾手

永、総庄屋兼代官、初代菅尾市

兵衛の墓がある。(基礎巾〇・七

六米、角台石巾〇・四、高〇・

三米、墓碑は円型で巾〇・四五、

高〇・八米)

貞享二年(一六八五)九月十

四日 七十八才

积了安不退位 俗名菅尾市兵

衛尉義秀の銘あり。

その前に、二代菅尾市兵衛の墓石がある。

角型で(下巾〇・六、上巾〇・五一、高〇・六、厚〇・三六

米)



元禄十三年(一七〇〇)庚辰年六月十三日春秋六十二才。

积了慶不退位 俗名 菅尾市兵衛吉秀

施主 山村保門 菅尾市兵衛 山村源八郎の銘あり。

この地は菅尾の高台地で、以前は数百年を経た杉の巨木があ
つて、各地より遠望され、菅尾の目標地点であった。又、鳥類
もこれを目標に飛び廻っていたようで、そのため「鳥越」と云
う名がつけられたと云う。その巨木も十数年前に落雷により倒
された。

二四四 (恵良の墓)

所在地 大字菅尾

菅尾共同茶工場の前に、通称

「恵良の墓」と呼んでいる、元

和元年(一六一五)頃よりの古

い墓石が多数あり、老ふじの大

きい古木がこんもりと繁り、菅

尾のシンボルの一つである。

「恵良」とは、元阿蘇大宮司

の姓にて、阿蘇家に関係があり

て、恵良の地名がつけられたも

のと思われる。



二四五 (山村家累代の墓)

所在地 大字菅尾

通称「鳥り越え」と呼んでいる所に、山村家累代の墓地あり、藩政時代菅尾総庄屋兼代官の子孫の墓地が建立されてある。

碑文に

「山村藤右衛門義秀、第一代菅尾市兵衛

寛文十年(一六七〇)四月、肥後国主、細川公ニ命ゼラレ、米山大惣庄屋兼御代官ニ就任同時米山号ヲ菅尾号ト改称、先祖代々山村家一族此ノ地ニ眠ル」と銘がある。

二四六 (今村山城守の廟)

所在地 大字米迫(後山)

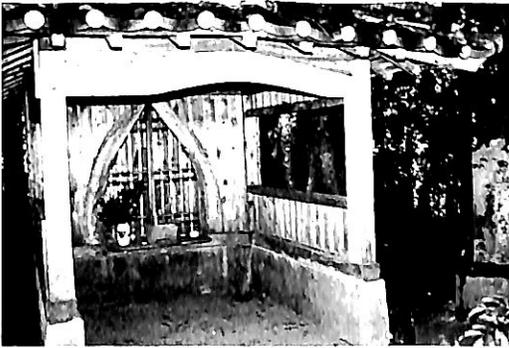
昭和三十年四月今村家三百八十年祭の記念事業として、裔孫今村虎熊氏が再建された。今村山城守 源 親貞之廟がある。

今邑山城守 従五位下朝臣

源 親貞

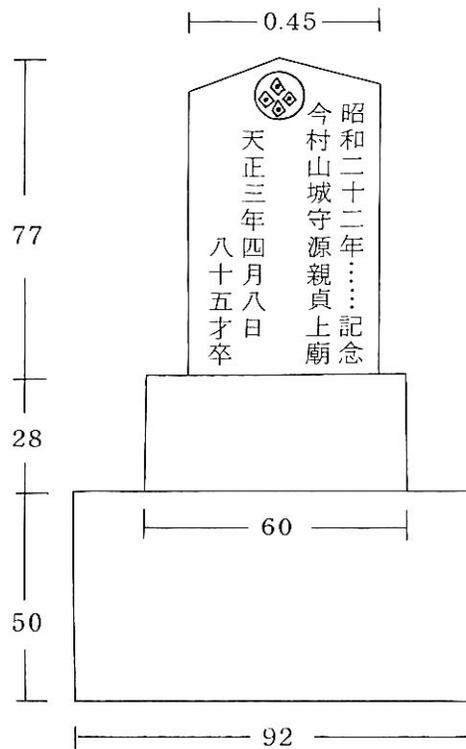
天正三年(一五七五)

四月八日



法号 光運院義英大居士 八十五才卒と碑文あり。

基礎(コンクリート巾〇・九三、高〇・五米) 台石切石(巾〇・六、厚〇・二八米) 碑石切石(巾〇・四五、高〇・七七、厚〇・一五米)の碑である。



二四七 (今村家祖先の墓)

所在地 大字今(平原)

役場庁舎の裏山に「今村家祖先の墓」と記された墓石がある。ここは、米山城主、今村山城守の出城があった所と云われ、通称「東の城」とも呼ばれ、ここの城主は、山城守の弟で、その墓地と伝へられている。

「現在の役場庁舎敷地は、以前は畑であつて、山城守の出城があつた時の「花庭」であつたと云われ、今でも老人の方は「お

花畑」と呼んでいる。庁舎内には今も梅の古木が残っている。

墓碑、基礎割

石積（巾〇・八、高〇・五五米）



台石（巾〇・八、厚〇・米）碑（下巾〇・二二上巾〇・四大高〇・七六米）の自然石の碑である。

二四八 (柏民部大輔の墓)

所在地 大字柏（元柏）

山部家の墓地より、小道を左に進むと、又墓地があり、その奥話のところに五輪塔であったかと思われるような古い墓がある。ここが、柏民部大輔の墓地と云われている。



頭部円型で（巾〇・三米）笠部（巾〇・三五、高〇・二米）

台石部分は破損し石塊五個をとどめている。

柏民部大輔は、当時柏城主にして、天正十四年島津勢、高千穂勢、高森城攻略の途次、柏城を攻撃したが、当時城主柏民部は、浜の館に出向中なるが、此の報をきくや、直に帰城するに、城は既に落城し、憤懣やかたなく、高森十里山に、敵將、新納武藏守を追撃し、激戦の結果、遂に悲壮な戦死をとげたという。

後に遺骸を城下に迎へ、この地に埋葬せりと云う。

二四九 (井竿五三右衛門道弘の墓)

所在地 大字高畑

年称神社境内 大宝塔の横に、この宝塔を建立された井竿五三右衛門道弘の墓碑がある。台石三段（〇・七二米）の上に（高〇・六九、巾〇・二九、笠巾〇・五九、笠高〇・四米）の碑である。井竿五三右衛門は、宗旨ケ鶴の人で阿蘇家の家臣として仕えた人と云う。

碑文に

去天保十二之春巡拝四国八十八所之宝刹時悉取靈場之土而帰尔来于朝干夕此土置柏在其上勸請諸尊欲成於自他同二世安樂之行願久然今度始修理随喜者多而馳于東西勸進有縁回于南北乞助力處受不料之財施得不期之人力遙自猫岳之麓不厭里程仕数萬之

人夫運石忽命石工祈建立宝塔於此地勸請金毘羅宮於塚野原安置
諸仏於柏在中八十八所速令満足宿願者也

井竿五三右衛門道弘

弘化四（一八四七）末春建立

妙光院釈法道寿光信士

歳 六十七

（通訳）

去る天保十二（一八四一）の春四国八十八ヶ所の宝刹を巡拝
せし時ことごとく靈の土を取り帰りて朝に夕に此の土を柏在に
土を置き、其の上に諸仏を勸請し自他同じく二世安樂の行願を
成せんと慾すること久し然して今度修理を始んと随喜者多くし
て東西に（于）馳せて勸進し有（縁）南北に（于）回ぐりて助
力を乞いし処、料らざるの財施を受け期せざるの人力を得、遙

か猫（根子）岳麓

より里程を厭わず

数万の人夫に委せ

石を運ぶ、忽ち石

工に命じて新たに

宝塔を此の地に建

立し金毘羅宮を塚

野原に勸請し、諸仏を柏在中八十八ヶ所に連ねて安置す宿願を



満足せしむる者也。

弘化四末（一八七四）春建立

二五〇 （甲斐萬太兵衛藤原の墓）

所在地 大字高畑

部落公民館前四又路の右側杉山の中の墓所の一角に板碑があ
り、自然石で（高一・一、中巾〇・四五、厚〇・二米）正面に、
甲斐萬太兵衛藤原墓とあり碑文に、

文化十三丙子（一八一六）□春吉尋□□藤原之県靈神場祭
向光之原思一寄石於□祖□□□□而□之□于孫□尚祖體靈令湿
尊敬嗚呼悲哉年月□不得□始末百□者不賢之過

欲乞改而明墓已爾

建主 辰 治

初右衛門 と銘あり

甲斐萬太兵衛は、

肥後戦国期の最大

の武将と云われた

甲斐宗運の孫で、

系図に依れば岩戸

村より移住し、甲

斐家の祖とされ、



現在、野原の、甲斐始氏が十二代目と云われ系図を保管されてある。

二五一 (猿丸太夫の墓)

所在地 大字柳(西猿丸)

国道三三五号線沿い、猿丸部

落のはずれに、猿丸太夫翁の墓地入口の案内柱が建っている。

これより約百米、上ったところに、太夫の墓がある。

(百人一首にある)

奥山の紅葉ふみわけなく鹿の

声きくときぞ 秋は かなしき

の歌で有名である。

放浪の歌人とも、云われているが、此の地で亡くなり葬られている地と云われている。

又、太夫の母を葬ったと云わる所も近くにある、猿丸部落観音堂の前方にある「樫」の大木で、胴回り五米以上もあつたと云われている。昭和四十五年に落雷のために倒れ、今は切り株のみが残っている。(佐藤重人氏の庭先)

猿丸太夫の墓は、タブの大木で、その横に、



なる神のおとも高き宿人の

よをさるまるの奥津城おくつきぞこれ

有雄

猿丸の君が代の名神さびて

残るぞしるし おく津城つくさの塚

□□

と甲斐有雄(野尻尾下出身)の歌碑が建てられている。

猿丸地区の方々は、毎年八月七日に、墓掃除を行い、太夫の霊を弔うている。タブの大木の根に、台石(巾一・〇、高〇・六米)の上に、自然石(高〇・八六、巾〇・二九、厚〇・一一米)の碑が建っている。

二五二 (梶原玄田景末の墓)

所在地 大字伊勢(梶原)

島田広長氏宅裏

山に板碑が建立されてある。自然石

で(巾〇・三二、

高〇・九、厚〇・

一八)中央上部に

(丑) (ア) 大日如



来の梵字ありて、寒月玄水居士 天保九年（一八三八）八月二十五日 施主 当巴中造是 と銘がある。

この碑は、梶原玄太景末の墓碑とも云われ、荒たな方で、慎重に葬っていると云われているが、梶原玄太景末と云う人については、詳かでない。

二五三 (興梧勝蔵先生の墓)

所在地 大字上巻尾

部落納骨堂の前に、興梧勝蔵先生の墓碑が建立されてある。

台石三段で全長
二・三三米、碑石
(巾〇・三一、高
〇・七七米)笠(巾
〇・六一、高〇・
五二米)のもので、
碑の正面に、積祐



信、側面に、明治廿九年十月建設 門弟中 現今存命 興梧勝蔵先生 行年八十才、裏面に明治三十六年卯旧十一月廿一日卒ス 台石に発起人藤原義永氏外七十三名の銘がある。

この碑は、門弟が先生の偉徳を誉^たえて、先生が生存中に建立されたものであり、先生が如何に人望が厚く、門弟より慕はれ

ていたか又門弟の中には、清和村の人々も多くあり、先生の偉大さがうかがえる。

(先生は、現在、興梧輝邦さんの祖祖父にあたる方である。)

二五四 (西越前守惟延入道の墓)

所在地 大字 柳

町道より右に入り、小道を約百米程進んだ道上に、自然石の墓碑がある。

台石(幅一・〇、厚〇・二米)の上に、高(〇・七六、幅〇・三五、厚〇・一米)のもので、中央上部に梵字があり、中央



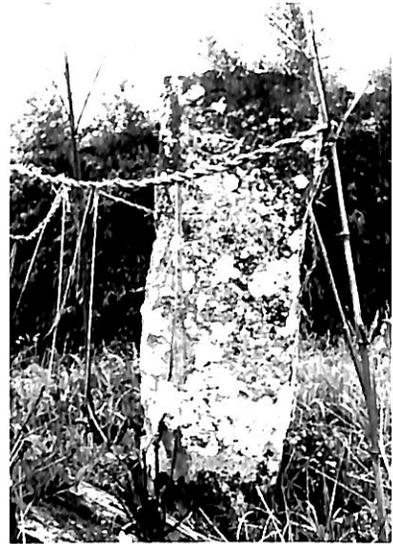
に、南無阿弥陀仏積清蓮墓所、右に西越前守惟延入道 元和二丙辰(一六一六)二月十五日施主 曾孫佐藤重次 と銘あり。西越前守は、阿蘇家五大家老の一人であったと云う。

二五五 (朝日勘解由の墓)

所在地 大字下山

部落道左上に板碑が建立されてある。
正面上部に梵字があり、朝日勘解由ノ墓 七月八日と銘あり、
その根元に、宝篋

印塔の一部がある。
建立年が不明であるが、相当古きものと思われ、部落の人々は、朝日將軍さんと呼んでいる。碑は盛土の上に自然石のまゝ建っている。(高一・三、
巾〇・四五、厚〇・二五米)



二五六 (佐藤武蔵の墓)

所在地 大字大見口(岩下)

部落対岸の山中の天満宮の前に墓碑が、建立されている。碑石、正面に、寛文八年(一六六八)戊申八月十四日 大崇院正



学大居士 俗名 佐藤武蔵 行年四十八才 と銘あり、下部に、
岩下立主、佐渡仙之十、同熊太郎、同今朝二郎、同久太郎、同
作太、同仙太郎、同角ノ十、同清八、の銘あり。

(阿蘇郡誌の古墳墓の欄にその名がある。)
三段の台石(下台 巾一・二五、厚〇・一七、中台 巾〇・
八、厚〇・二〇、上台 巾〇・六、高〇・二〇米) 碑石は、自
然石(下巾〇・三八、中巾〇・六七、高〇・九、厚〇・一四米)
二五七 (芹口山城守の墓)

所在地 大字高畑(赤立)

老松の古木の根に、自然石で無名の板碑が建立されている。芹口山城守の墓所といわれている。(第一集参照)

(高一・四五、巾一・〇、厚〇・三五米)



二五八 (奈須與一宗社の墓)

所在地 大字大見口

奈須家の墓地内に、奈須與一(大八の兄といわれる)の墓地がある。

基礎(巾一・四五、高〇・五米の自然石) 碑(下部〇・六五、中部〇・七、上部〇・五、厚〇・一五) 〇・二七米の自然石) 中央に、南無阿弥陀佛の、刻みがよくやく読みとれるが、両側の字は、判読できない。

後裔と云われる、奈須時男氏の家には、奈須与一が使用していた、銘刀「百足丸」が家宝として「奉謹納奈須与一宗社宝劔守護祈靈」と書かれた箱に、大事に保存されてある。

氏の話によれば、古文書等も保存されてあったが、安政年間に本宅の火災の為に焼失され、又昭和の初期迄には、刀劔類等が沢山保存されてあったと云う。



二五九 (玉目丹波守の墓)

所在地 大字玉目

町道右側に「玉目丹波守の墓入口」の立札がある。

この上部のタブの大木の根本に、宝塔と思われる一部が祀られてあり、初代玉目丹波守の墓地と云われている。

加藤清正公の奥方「正応院」は丹波守の娘と云われ義父にあたる。

相輪部がこわれ三個ありて、上部のもの(長〇・三九、巾〇・一五米) 笠部は「巾〇・五、高〇・一八と巾〇・三八、高〇・二〇) 二個がある。



※「町内で、宝篋印塔等崩壊したまゝのものが多数見られるが、これ等は、その昔より、由緒ありて祀られているもので現代では次第に薄らぎ去って終っているが、何んとか地元の方々により復元していただきたいものと思います。」

二五九の一（仁田水左衛門の墓）

所在地 大字 玉目

仁田水家墓地内に、鎌倉時代と思われる、宝篋印塔（頭部のみ）二基の墓地があり、昔から、女人禁制と云われ、現在も墓掃除は男手にて、行われていると云う。

後裔といわれる仁田水家は、明治初期に、火災のため焼失し、記録的なものは、何にも残っていないが、阿蘇家五大家老の一人である仁田水左衛門の墓地とも云われているが詳かでない。

二基共、基礎は、

玉石で盛られ（各

一・〇米角）

前一基は、相輪

部 巾〇・一四、

長〇・五米

後一基 相輪

部 巾〇・一四、長〇・三二、飾部の一部全〇・五七米



第4編 石塔

石塔には色々あり、供養塔として建立されているものが多いようであるが、各分類に入らない石塔関係を本編に掲げた。

二六〇 所在地 大字滝上(下鶴)

教尊寺登山石段建設の碑にて、石段入口の右側に、高さ約二・五、巾〇・五五米の石碑が、建立されてある。この石碑は、教尊寺登山の石段建設の寄附者の人名

が記されてある。

当時、八代目坊守、

八高タカ石工、橋

本相吉、寺総代、

八田銀平外数名の

銘がある。



二六一 所在地 大字塩原(犬淵)

入嶋虎雄氏宅入口左上山に、明音大神と刻まれた碑が建立されてある。

古老の話しによ

れば、昔、明音と

云う偉いお坊さん

が肥後と日向に居

て、肥後明音、日

向明音と云われ国

境のためにお互い

に勢力争いがたえなかつたという。ある時、肥後明音と日向明

音が決する時が来て「業くらべ」を行つたという。その結果、

肥後明音が勝利した。以来、肥後明音の名が全国に広がった。

それ以来、信仰者も増加したという。後に肥後明音は、この地

より、旅立ちするが、村人達は明音を敬慕し、明音大神と名づ

け崇拜してきたと云う。

建立年月は不明

基礎(コンクリート 巾〇・九五、高〇・九五米) 碑石(巾

〇・二、厚〇・二、高二・一五米)の自然石である。

二六二 所在地 大字滝上(土戸)

公民館正面上部杉山々頂に通称天狗さんと呼ばれている祠がある。この中には石造物は無いが、その前方に高さ(〇・四五、巾〇・一八米)の石碑が建立されてある。



碑文に「本地は、元土戸字舟ノ迫一、一三三番地十九名有之墓地ニシテ此ノ地ニ正立シタル松一本杉七本ヲ明治四十二年四月ヲモツテ売払□□□六百八十円□□□内金五拾七圓建□トシ残金六百二十三圓ヲ学校道路工事トシ開通シ本地同時杉木植付」と記しあり。

二六三 所在地 大字馬見原（岩尾野）

岩尾野公民館

（大日堂）正面

左側に（巾〇・

二、高〇・六米）

の碑がある。享

保十五歳（一七

三〇）辛戌七月



日とあり、正面に奉寄進氏子五十人馬見原町忠次郎、左面に石切善助とある。

二六四 所在地 大字柏（溜渕）

不動尊堂前の大樫の根元左右に、石塔二基建立しあり、一基は明和四年（一七六七）のもので二一九年経過しており、他の一基は、天保七年（一八三六）の建立のものである。

上津留氏子中と記されてある。

二六五 所在地 大字橋（椀山）

部落中央の阿蘇神社の庭に高〇・七、巾〇・二米の石塔が建立されてある。正面に奉納御神燈と記され、横に、文化八年末（一八一）二月、椀山村願主 金治総氏子中と銘あり。

二六六 所在地 大字長谷（稲生）

国道左側伊勢大神宮の後に石塔一基が建立しあり、碑石に正一位稻荷大明神、昭和四七年一月、横面以後藤久美と銘あり、台石二段で下（巾〇・五一、厚〇・一七米）上（巾〇・三一、厚〇・一七米）碑石（巾〇・二二、高〇・五二、厚〇・一八米）

二六七 所在地 大字上差尾（百枝）

部落（岩下線入口）四叉路より右、旧道を約三〇米程入った左側に観音堂がある。この堂は明治三十九年に



焼失し再建されたもので、碑石には正面に「佛鉢灰塚」とあり、裏面には、明治三十九年八月九日 火災 六鉢佛像焼失其ノ灰ヲ此ノ地ニ埋メ塔ヲ立ツ、と銘あり。

台石二段（下石巾〇・四七、厚〇・一五、上石巾〇・三三、厚〇・一九米）

碑石（巾〇・三三、高〇・五八、厚〇・三二米）

第5編 道 標

一般的に「道しるべ」と呼ばれている。最近、道路の改良工事と車の時代にかわりあまり見かけられる機会が少なくなったが、旧道を歩いてみると三叉路あたりに見うけることができる。昔

の人は、歩行の旅が主であつて、ある時は、野に伏し、星を仰ぎ、道に迷つたりして不安の旅が続けられたことでしょう。こうした時に、この「道しるべ」に出会つた時に、どんなにか喜んだことか、その姿が今脳裏に浮かぶ。

野尻の甲斐有雄さんは、阿蘇から豊後、日向にかけて、千六百ヶ所を超える道標を建てられた方で、本町内にも多数の建立が残っているが、旅人の安全を祈り乍ら、こつこつと石に刻みこまれた人の心が、今もなを野末の辻に息づいている。

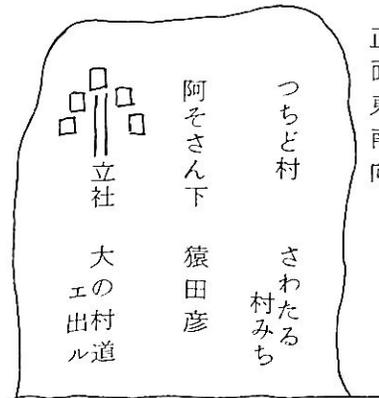
二六八 所在地 大字滝上（松葉）

旧街道の六叉路に他と変わった猿田彦がある。此の道標は、昔時旅人の安全を祈願して慶應二年、松葉村安兵衛が建立したものである。安兵衛なる人は、松葉村在住の、頭百姓であつたと云われる。分岐点の六叉路とは、馬見原、さわたる、土戸、阿そさん、幣立社、大の村の各村道となつている。

五幣の絵入図案の道標は、めづらしく、貴重であり、大事に保存したいものである。

自然石で（高さ〇・五八、巾〇・五二、厚〇・一七米）別図の通り、記されてある。

正面東南向



後面北南向



二六九 所在地 大字滝上(須刈原)

須刈原旧道四叉路に、自然石の碑(高さ〇・九七、巾〇・四五、厚〇・一七米)が建っている。

正面に、右へいたてみち。左やべくま本みち。裏面に、建主八田恒助 と銘あり。

八田恒助なる人は、馬見原の商人として、本八代屋、工藤家古文書に依ると、天保十二年(一八四一)四月、寸志上納に依り、八田姓名字許あり、地士を任りて、其の記念に八田恒助が、旅人の安全を祈願して、此の地に建立したものと云われている。

尚、安政二年(一八五五)三月寸志上納に依り一領一疋を拜領仕、御勤めありてか、安政五年九月より、馬見原口番所役人として勤番ありたり、又元治二年(一八六五)三月十八日寸志上納に依り、小姓に列しあり、当人は明治四年(一八七二)五月二十九日死亡されている。

又、此の地には往事、出小屋ありて旅人の休息せる茶店が昭和の始頃まであった。



史蹟 道標板碑

(参考文庫)
馬見原古本

馬見原河
八田恒助

馬見原河
八田恒助
一八七二

八田恒助

一八七二年三月寸志上納に依り一領一疋を拜領仕、御勤めありてか、安政五年九月より、馬見原口番所役人として勤番ありたり、又元治二年(一八六五)三月十八日寸志上納に依り、小姓に列しあり、当人は明治四年(一八七二)五月二十九日死亡されている。

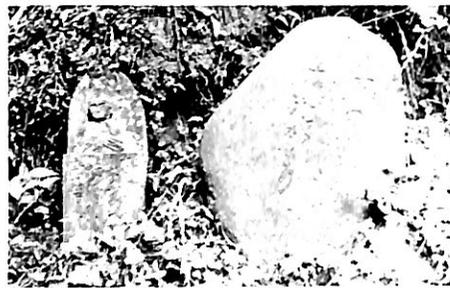
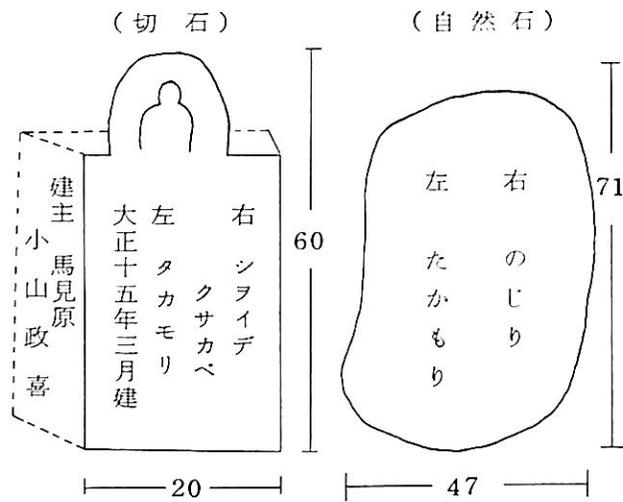
一八七二年三月寸志上納に依り一領一疋を拜領仕、御勤めありてか、安政五年九月より、馬見原口番所役人として勤番ありたり、又元治二年(一八六五)三月十八日寸志上納に依り、小姓に列しあり、当人は明治四年(一八七二)五月二十九日死亡されている。

一八七二年三月寸志上納に依り一領一疋を拜領仕、御勤めありてか、安政五年九月より、馬見原口番所役人として勤番ありたり、又元治二年(一八六五)三月十八日寸志上納に依り、小姓に列しあり、当人は明治四年(一八七二)五月二十九日死亡されている。

二七〇 所在地 大字塩出迫(牛ヶ山)

町道菅尾・上塩出線、旧道三叉路の地点に道標が二基建立されている。一つは、自然石(巾〇・四七、高〇・七一米)で、面に、右のじり、左たかもりと刻まれ、その横に切石(巾〇・二、高〇・六米)で、上部に地像尊が刻まれ、下に、右シライデ、ノジリ、クサカベ、左タカモリ、大正十五年三月建之、横

面に建主 馬見原 小山政喜と銘がある。
昔から清正道路とも云われ重要な路線であつて、旅人の安全
を祈り、建てられたものであろう。



二七一 所在地 大字東竹原(竹原)

お大師堂前三叉路に自然石の道標碑がある。(縦〇・六三、巾
〇・三五、厚〇・一八米)正面に、右たかもり 左のぢり 中
央下に当所竹原村、横面に尾下村、甲斐有雄建とあり、裏面に
石八基持方と左上部にありて下方に、甲斐半五郎、甲斐新作、
後藤尉八、木村寅次郎、甲斐庄八、菅原金太、甲斐林蔵、菅原

二三良、山部三木太、小糸亀口、小糸寿一良、後藤栄蔵 と銘
がある。

第6編 石 橋

石造アーチ橋は、ローマで開発された。シルクロードを経て中国からの地理的に近い開港の長崎に伝わり、長崎市の中国式興福寺の名僧如定（によじょう）が、寛永十一年（一六三四）に眼鏡橋を架けたのが、わが国最初のもので云われている。アーチ石橋は、中国では石拱橋といわれ、拱とは両手の指を組み合わせて敬礼する中国の礼儀作法で、その形がアーチに似ているところから石拱橋と呼ぶようになった。わが国では、石橋、眼鏡橋、目鑑橋、太鼓橋とも呼ばれている。眼鏡橋は九州に多く明治以前のもので、熊本県内が一番多く、約百五十橋と云われ、県内では、砥用町の霊台橋は日本最大と云われている。昔は川は交通上の一大障害であった。勿論川を道路代わりに利用することもあったが、洪水時は、通交杜絶になり、木橋は四、五年如に架け替えねばならず、諸産物等の輸送に支障が大きかった。

石橋の架設により、地域住民の恩恵は大きかったであろう。

町内にも、いくつかの石橋の架設があつていたようであるが、道路の改良工事等により取りこわれ又埋没されて、現在では別記の二つの石橋が残っているが、貴重な文化財として保存し

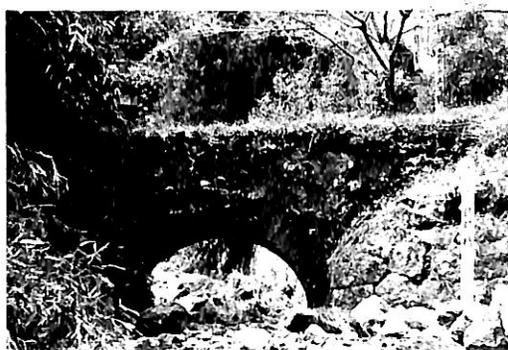
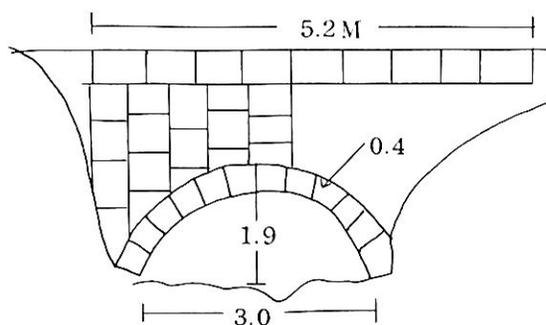
たいものである。

二七二 所在地 大字滝上（下鶴）

下番橋の下を、畑の地川が流れ、五ヶ瀬川本流に注いでいるが、この吐き口、河口側に石橋の目鏡橋が架つている。

この橋は、天保六年七月（一八三五）当町、工藤家を始め町内商家が、総庄屋、菅尾市兵衛に、寸志上納願い出て建造されたものといわれる。（工藤家古文書）

施工は当時の名石工 岩永三五郎が、若い頃に架けたものと云われている。



一、年代 天保時代

- 二、橋 長 五・二米
- 三、橋 幅 三・二米
- 四、径 間 三・〇米
- 五、拱 矢 一・九米
- 六、拱 厚 〇・四米

(第一集参照乙)

初代

菅原 宗 氏
 (宗氏の子孫 宗氏の子孫)

菅原 宗 氏

八田 左 武 郎

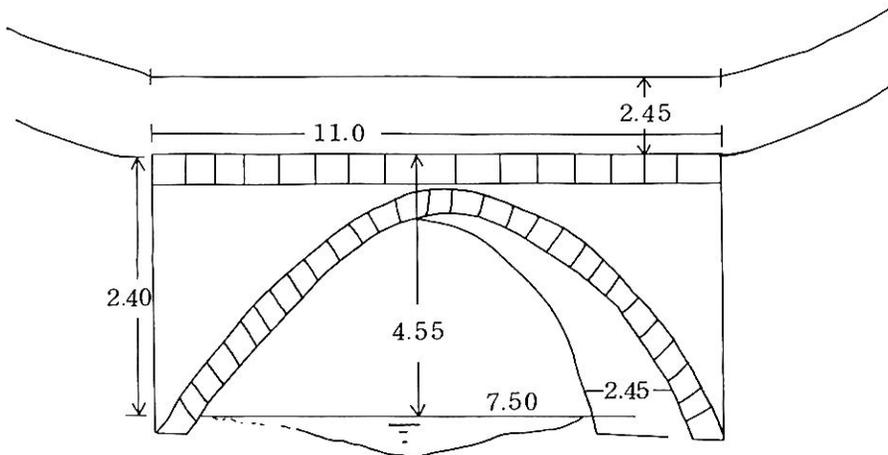
文政五年三月廿五日
 文政五年三月廿五日
 文政五年三月廿五日
 文政五年三月廿五日

一、天保五年四月廿五日
 一、天保五年四月廿五日
 一、天保五年四月廿五日
 一、天保五年四月廿五日

六十 五十二

一、二、三、四

他、天保五年七月、上納仕、並申出
 他、天保五年七月、上納仕、並申出



二七三 所在地 大字下山(宗旨ヶ鶴)

古米川下流、町道下山線上に架設されている。架設の年代等不明であるが、長年の風雪や洪水のため、破損がひどく、通交不能となり上流部に新橋が架け替えられているが、貴重な文化財であり、これの対策が痛感される。

第7編 記念碑等

記念碑等については、「はしがき」に記したように、現在では文化財的な年月の経過はみていないが、明治以来のものがほとんどである。明治も、百年を経てきており、碑文等が風化されつつあるので、後世のために、今回の調査に当って、登載することとした。

記念碑等は七十基を登載した。

この碑文を見ると、私達の諸先輩が本町の行政の発展に、各種産業の繁栄・交通生活文化の向上発展のために、幾多の苦勞をされたことが忍ばれてくるとともに、「町のあゆみ」が現われている。

一、人 物

二七四 頌徳碑（松田喜一先生）

所在地 大字滝上

馬見原中学校正門右側に、農聖松田喜一先生頌徳碑（増田義孝謹書）と記された頌徳碑が、建立されている。碑の台石中央に、銅板による「建碑のこと」として、次のように銘記してある。

農聖松田喜一先生は、熊本県下益城郡豊川村に生まれ、祖父伝来の公共奉仕の精神をうけつぎ、大正九年農友会の創立と共に、実習所を開設、農村子弟養成に当たられ、爾来五十年その教えを希うもの実に十五万を越え、其の間幾多の災害や困苦と闘い乍ら初志を貫徹、農村振興発展に一身を捧げられ、常人の幾世紀にもなし得、多くの事績を残された。特に当地方に、昭和六年以来、数回に亘り、講習講演会に御来町頂き、先生独特の真理に基づく農魂と農法、其の感化と実践に依る地域開発の足跡は、誠に大である。昭和四十三年七月三十日、矢部高校馬見原分校生徒百五十名、実習所視察に於ける、大熱演の御講話が大先生の最後となり八十一才の生涯を終えられたのである。この万世不滅の農魂、大先生の御功績と遺徳を永く後世に伝えることは、極めて意義深いものと思ひ、多額の協賛を得て茲に頌徳碑を建立した所以である。

昭和四十四年

七月 片岡正行

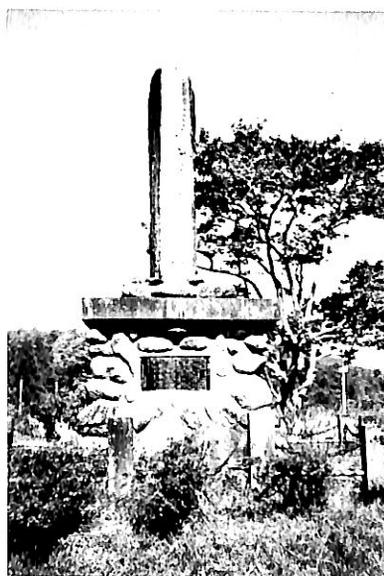
謹識

松田喜一先生

頌徳碑建設期成

会

基礎（下幅



二・三〇、上幅一・八三米、高一・八四米）台石（厚〇・二二）の上に自然石があり、碑（高二・六〇、幅〇・四米）、周囲（四・六米四方の鎖があり）玉石敷きとなっている。

二七五 顕彰碑（田中 巖先生）

所在地 大字馬見原

役場支所前に、顕彰碑が建立されてある。（基礎下幅一・一六、上幅〇・九二米）台石（幅一・三一、厚〇・一八米）碑石（幅〇・八四、高〇・五九、厚〇・二八米）

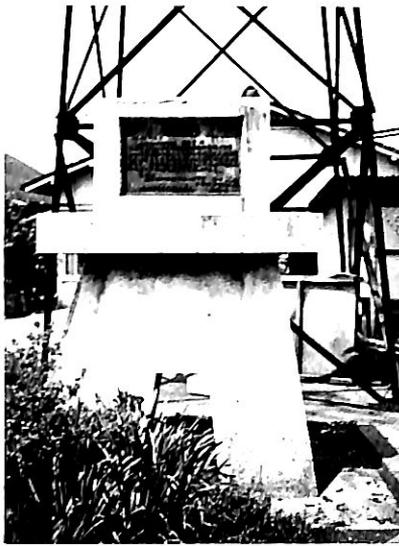
中央に銅板で次の碑文が記されてある。

顕彰碑

建碑のこと

馬見原公民館敷地五百七坪。上記は蘇陽町出身熊本市新市街七番地十七号

田中病院長田中



巖氏により郷土の発展と人材育成の重要なことを痛感せられるため、茲にその碑を建立した所以である。

寄贈者

熊本市新市街七番十七号

田中 巖殿

男医学博士 田中民夫殿

昭和四十二年六月二十日建立

蘇陽町

二七六 頌徳碑（山村菅村先生）

所在地 大字菅尾（前）

県道清和高森線沿い（佐藤商店前）に、山村菅村先生頌徳碑が建立されてある。

山村甚八（号を菅村）先生は、元菅尾郷総庄屋兼代官所（通称会所）末代の人で菅尾小学校創設の地であり又初代の校長にして、子弟相集いて先生の御恩徳を後世に伝えんとして昭和十七年に建立されたもので、その碑に師の経歴が次のように記されてある。

山村甚八先生碑文

「吾等の恩師山村甚八先生（号を菅村）は文久二年八月十五日上益城郡浜町（現矢部町）富田一松翁の二男として御生誕せられ、明治三十三年菅尾郷随一の旧家総庄屋山村家に養子として入籍、資性篤実にして向学の念強く漢学者下田易、大田黒積

水、友成正、鳥井雪田等の諸師に就きて漢学、詩、普通学を修業、明治二十三年師範学校御卒業後は浜町、小峯、大野、菅尾等の各学校長に任せられ、育英事業に尽瘁せられる事、前後三十有三年、その間矢部教育会副会長又は会長として、常に教育界枢要の地位にあり、その薰陶を受けたる者、無慮八百に及び人格、清純、高潔、社会の木として地方の教化善導に献身、郷党の子弟亦父の如く敬慕す。真に師表の鑑たり、依つて大正九年には畏くも銀杯拝受の光榮に、翌十年には叙勲の恩命に浴せらる。

大正十二年に開地につかれて後は、専ら悠々自適の余生を楽しまれ、御歳八十に達せられるも、尚御健在に任すことは吾等子弟の慶祝に堪えざるところなり。

近時稍もすれば精神的事業に至誠一貫貢献せられたる廉潔の士に対する尊敬の念稀薄ならんとするは社会風教上、憂慮に堪えざる所、茲に

於て同志相図り

先生の頌徳碑建

設を計画し、其

の御恩徳の永を

後世に伝え敬仰

謝恩、微意を表



し、且つ師道積廃せんとする風潮の一新に資せんとす。幸に同憂具眠の士多数賛意を表せられ、此の聖なる事業の完遂に協力せられたるは発起人一同と欣快措く能はざるところにして深く謝意を表す」

碑は、基礎石積（下幅三・〇、上幅二・二五、高一・五一米）台石、下切石（上幅一・〇、下幅一・三、高〇・七三米）、上台（幅一・二、高〇・二米）、碑切石（幅〇・七二、高一・二二米）のものである。

二七七 頌徳碑（小屋迫 一先生）現今存命

所在地 大字二瀬本（宮の下）

二瀬本神社登口前に頌徳碑が建立されてある。この碑は、小屋迫 一先生頌徳碑、松野鶴平書と記され、昭和三十六年八月、議會を始め各種団体の代表者が小屋迫 一先生の偉徳をたたえて建設されたもので、碑文に次のように銅板に刻まれている。

小屋迫 一翁頌徳碑

小屋迫 一先生は、明治三十六年三月七日、小屋迫彦三郎翁の長男として生誕され、学業を終えて直に役場に奉職するや、村の発展は先ず道路にありと自ら其の企画と作業の指導を担任して、現在のバス道を開通された。更には村民の生活の向上と村の発展を図るためには、是非共巨額の財産を造成する必要あり